バンコク日本人学校における進路指導

前泰日協会学校バンコク校(バンコク日本人学校)教諭
新潟県立津南中等教育学校教諭　波多野　公恵

キーワード：進路指導、大規模校、中学部

2021 年 3 月 31 日現在
泰日協会学校(バンコク日本人学校)
Thai Japanese association school
URL：https://www.tjas.ac.th
児童生徒数　小学部約 2100 人　中学部約 500 人

1.　はじめに

平成 30 年（2018 年）4 月より令和 3 年（2021 年）3 月まで 3 年間、バンコク日本人学校に勤務した。任期中は中学部 3 年学級担任、進路指導主任、中学部教務主任として、進路指導や中学部の調整、運営に関わってきた。バンコク日本人学校の児童生徒数は約 2600 人で世界一だが、生徒の進学先も多種多様であり、進学先の数についても在外教育施設中では世界一と言える。3 年間の進路先を見ると、日本の都道府県すべてを網羅するのではないだろうか。また日本のみに限らず、タイ国内や国外のインターナショナルスクールや在外の高等学校へ進学する生徒もいる。これらのことから進路業務を効率化させ、いかに進路指導を充実させるかが生徒の進路実現の鍵である。

令和 2 年（2020 年）3 月以降、新型コロナウイルスの影響により、バンコクはロックダウンとなり、令和 2 年度（2020）4 月は、タイ教育省の指示により学校が開けず、Google Classroom を通しての在宅学習で始まることになった。進路指導の在り方も大きく変わった 1 年であったが、生徒の進路実現を支援する教師の姿に変わりはない。現地の生活、教育環境を知りながら学んだことを以下に述べる。

2.　1 年目―学級担任の視点から―

1 年目は中学校 3 年生の学級担任として、教科指導、学級指導、進路指導にかかわることができた。タイという異文化の中で生活している日本人学校の児童生徒について理解したいと考え、タイの生活や文化、歴史を知るとともに現地の教育環境の調査研究を行い、現地校訪問や生活環境について調べた。調べた中で感じたことは、日本人学校の学び以外でも異文化（タイ）で生活している中で学んだり、体験したりすることから国際性が養われる要素が多いということだ。機会をとらえ、伝統的な行事等に参加した。また、進路指導においては、日本の高校への進学が大半を占め（約 8 割）、現地インター校等への進学する生徒（2 割）もおり、様々な進路選択があることがわかった。

3.　2 年目―進路指導主任の視点から―

2 年目は進路指導主任として、主に中学校 3 年生の進路指導にかかわることができた。また、派遣前の中等教育学校では、6 年生（高校 3 年生）の担任として進路指導に携わっていたため、全国の附属高校についてある程度知っていたことが、バンコクで全国多岐に渡る進路指導に生かされたと思う。さらに、シニア派遣として 2 回目の海外派遣で、海外受験業務について知っていた先生方もいたことで業務が円滑に進んだ。1 年目の経験を生かしながら、生徒一人ひとりが自分に適した進路選択ができるように 1 年間の進路指導、

計画を考え実行した。進路指導を通して、やはり海外においても精神的な自律がなければ自己の進路を選ぶことができないのではないかと考え、自律した学習者を育てる必要性を感じた。

(1) 中学校３年生の進学先について

進学先について把握するために中学校２年生の２月にアンケートを行い、３月に調査結果をまとめた。例年のように日本の高校へ８割、インターナショナル校や現地校、在外の高等学校へ２割の生徒が進学することがわかった。

(2) 進路指導１年間の流れについて

【4 月】第１回進路希望調査実施

進路希望調査は、さらに 6 月中旬、 9 月上旬、 12 月上旬と計４回行う。三者面談を行いながら受験計画に加除訂正を行い、４回目の希望調査で最終決定となるよう予定を組んだ。

【5 月】第１回進路説明会、海外子女財団学校説明会実施

第１回目の進路説明会では、生徒の能力をどこで生かすか限られた時間の中で考えていくために、１年間の進路指導の流れや進路選択の仕方、進路選択ガイダンス（高校説明会）にて説明した。選択できる高校の中で、できるだけ生徒の能力や適性にあう高校を見つけてほしいと考えた。さらに学校独自の「進路の手引」を発行（印刷・製本）して、進路決定の流れ、中学校卒業後に学ぶ道、進路選択について、帰国子女受入高等学校、寮のある主な学校、提出書類一覧、海外入試実施校について掲載した。保護者に有益な情報を盛り込めたと思う。

海外子女財団学校説明会では、13 校の高校のパネルディスカッションや説明のあと、個人相談会も行った。土曜日の午後を使い 250 名余りの保護者、生徒が有志で参加した。またその他 22 校が資料参加校として、資料提供を行った。

【5、6, 7 月】進路選択ガイダンス（以下、高校説明会）実施。なるべく、多くの高校をリサーチすることが、進路選択につながるので、説明会に参加するよう保護者に呼びかけた。また、インターネットで情報収集するのも大切であることを伝え、少しでも興味のある学校は、実際に、オープンスクールに参加するよう進路通信で情報を発信した。高校説明会は校内で 22 校を受け入れた。進路選択ガイダンスに参加することで、一般的な入試傾向が理解でき、意識も高まったと思う。

進路選択ガイダンス（高校説明会）

【6 月】第２回進路希望調査実施

５月～6 月の進路選択ガイダンスを得て、進路選択を修正させた。

【7 月】進路啓発講演会、個人調査票作成、進路希望調査実施、面接練習（学級）進路啓発講演会では、３社からパネリストを招いてパネルディスカッション形式で実施する方式が定着している。中学生全体が対象であることから、「3 業種×3 年 ＝ 3 年間で 9 業種」の話が聞けるように、パネリストのローテーションを組んでいる。必要に応じて見直しも行うこととしている。

10 月～12 月に帰国生入試が行われる。そのため、１学期中に個人調査票を作成し、書類準備に取りかかった。また、７月に行われる三者面談を受け、第３回進路希望調査を行い、受験計画を修正していく。

進路啓発講演会後の縦割班の意見交換

面接練習は7月までに学活で行った。（全3時間）学級代表を決める方式で行い、礼儀や言葉使い等を学ばせた。また、過去の質問や作文をまとめた「面接の達人」という冊子を発行し、使用した。

【8月】高校オープンスクール参加（有志）

保護者の一時帰国に合わせ高校のオープンスクールや見学を進めた。

【9月】第2回 進路説明会実施、第1回面接練習

第2回目の進路説明会では実際に帰国生入試、私立入試出願が始まるため、保護者、生徒を一同に以下のことを具体的に話した。

・募集要項・出願書類の入手方法

・担任への出願書類の依頼方法と依頼封筒の書き方

・年内入試の受験方法や注意点、私立、公立の受験手続について

第1回面接練習では、年内受験で面接が行われる生徒を対象に行った。希望制であるが学年の半数の生徒が参加し、約1ヶ月間、昼休み等を使って、管理職による面接練習を行った。

【10月】第3回進路説明会実施

第3回目の進路説明会では、ここまでの進路状況をさらに整理し、私立、公立の最新情報をお知らせし、公立高校への出願に向けて、保護者のみに説明した。今年度複雑な手続きのある2県については希望者のみ残ってもらい、追加説明も行った。また、卒業にあたり、通学バスの停止書類や卒業証書発行などの卒業に伴う各種調査用紙を配付し、卒業に向けての準備も行った。

【11月～12月】第4回進路希望調査実施、第2回面接練習校内推薦会議の開催、年内出願書類作成

12月の最終三者面談を得て、第4回進路希望調査を実施した。第2回面接練習では、 年明けに受験で面接が行われる生徒を対象に9月と同様に行った。また、年内帰国生受験、私立受験に向けて、校内推薦会議の開催、本校様式による調査書の作成、点検等の進路業務を学年職員で役割分担をして行った。

【1月～3月】年明け出願書類作成、要録抄本の発行

公立高校受検に向けて、各都道府県の事前申請、調査書など出願に必要な書類の作成を引き続き、学年部で行った。受験結果のまとめ、最終希望先が決まったら、要録抄本の作成を行った。

(3)実力テスト

定期テストは1学期に1回 2学期に2回実施するとともに、外部テストである実力テストを3回設けた(5月、9月、10月)。5月、10月は海外日本人学校向けにつくられた全国の国公立、私立の志望校判定がつくテストになっているので、志望校選択の目安となるものである。テストの難易度は基礎的内容が多いものになっている。

9 月のアジア実力テストは、上海やシンガポールなど、アジア全圏の日本人学校の生徒がほぼ全員受験するので、かなり正確な自分の相対的な実力が数値で確認することができる。難易度は基礎的な内容に加え、応用問題が出題される。

(4)進路だより「コンパス」の発行

進路情報等を伝えるために年間5回の進路だよりを発行した。

本校の進路希望は全国多岐に渡る。2019年度の入試も帰国生入試を利用する生徒が半数以上であった。またインターネット等の発達により、出願がWEB出願、受験票がWEB印刷となり、帰国生入試がより身近なものになり、受験者数も増加している。保護者の要望としては、駐在としてタイに来ているだけでなく、現地採用や現地で起業した方も多く、寮のある学校への要望が高い。また1，2年生の頃から中学3年生を見据えてガイダンスにくるご家庭も多かった。

2019年度の入試はIBコース（ 国際バカロレア）に合格した生徒が数名おり、保護者の新たなニーズが垣間見えたように思う（学校選択のプライオリティの変化）。高等学校でも 2020年の大学入試改革に向けて、公立一貫校の出願総数は横ばいであるが、大学附属系私立、共学進学校の選択は増加しており、難関の男子校、女子校の人気は継続している。入試についても英語入試、プレゼンテーション入試など新たな学力で入試を行う学校も増加している。タイ、バンコクは海外でありながら、日本の高校からの来校者も多い。そのため、日本からの情報も手に入りやすい。引き続き、新しい情報を生徒に還元し、よりよい進路選択ができるように努めていく必要がある。

4. 3年目―教務主任としての視点から、今後の指導の展望―

3年目の新年度はタイの緊急事態宣言により3月26日から4月30日までタイ全土の学校が休校となり、学校再開は5月となった。 再開といっても通常登校にはならず、インターネットを用いた在宅学習を行うことになった。急遽プラットホームをGoogle Classroomとして、試行錯誤で在宅学習を立ち上げていった。 7月より分散登校となり、2学期（9月）には通常登校となり、対面学習となるものの、新しい生活様式を作り、それに沿っての生活となった。さらに、3学期（1月）は再び休校となり、インターネットを用いた在宅学習を行うことになった。このような状況下で、 学校が在宅学習、通常登校どちらにおいてもどのような教育を展開するのかを明確化しなければいけない必然性を目の当たりにした。

1 月後半には、 管理職からの提案により今年度の取り組みを振り返り、引継ぎのために資料に起こす作業を行った。作成していく中で、学習指導要領を具現化し、自律した学習像について生徒・保護者・教職員がともに理解し、三位一体となった指導を行うことが、教育効果をあげるために必要であると強く感じた。

さらにこの年、令和3年3月の卒業式は、初めて日本とバンコクをオンラインでつないだ。過去にも例をみない試みであった。担任が呼名をするとステージ上の大画面の中で日本にいる生徒が自宅から返事をし、礼をする。3分の1の生徒、約40名が日本から参加した。2月に入ってから毎週日本にいる生徒とともに週1で卒業式練習を行った。私自身、「必ずオンラインでつなぎ、卒業式を行う」という3学年主任の熱い思いに動かされた。タイ教育省の下、また、バンコク日本人学校という大規模校で初めての試みは一筋縄ではいかずに苦労したが、教員や学校運営側、保護者の思いをつなぐことができたときは感無量であった。

5．おわりに

令和2年度の高校説明会等はオンラインとなる学校が増えた。国を越えた移動がままならない中、海外での高校説明会や海外入試も形を変えていくことになると進路指導は今後一層、与えられるものではなく保護者や生徒自らが進路について調べ、主体的に取り組むことが要求される。海外に派遣される教師は、常に学ぶ姿勢で、海外だからできることに、とことんこだわり、海外で学ぶことの良さを伝えながら、自律した学習者を育てる教育実践を行う必要がある。

日本の生活とは言語も文化も生活習慣も異なる環境の中で、ときには戸惑いながらも、積極的に新しいことに挑戦する生徒は、どんどん自分の世界を広げていくであろう。また、それはこれから国際社会を生き抜く必要な要素となるであろう。経験が生徒の生きる力となり、ひいてはその生徒自身がどう社会に貢献できるかを考え、実践していけるような「グローバル人材」になれるよう、教育活動に取り組みたいと考える。

異文化（タイ）で生活するよさについて体感し、日本人学校で自ら学ぶ姿勢を身につけた児童生徒たちが変化の激しい時代を生きていく中で、自らの目標にむかって邁進する姿を期待したい。

任期満了という形でバンコク日本人学校を去るわけであるが、日本の学校においても児童生徒が真の国際人として何が必要か模索するとともに、国際的視野をもった自律した学習者について考え、日本での進路指

導に生かしていきたい。